

は一もにい

男女共同参画社会の実現に向けて

特集 どういう意味？「男女共同参画社会」

市民インタビュー

- ・あなたは会社で結婚の予定を聞かれますか？
～女性にとって働きやすい職場とは～
- ・男女共同参画の視点から自治会活動を考えてみました

男女共同参画情報誌 No27 平成 19 年(2007) 2 月
企画・編集／「は一もにい」編集委員 伊藤 泓子
市民生活課 (男女共同参画係)
発行／東大和市生活環境部市民生活課
TEL 042(563)2111 FAX (563)5931

どういう意味？「男女共同参画社会」

「男女共同参画社会」という言葉をご存知でしょうか？

少し硬い言い方ですが、男女共同参画社会基本法によると、「男女が社会の対等な構成員として、自らの意思により社会のあらゆる分野における活動に参加する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的および文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」としています。簡単に言ってしまうと、「性別による差別を受けなく、誰もがその能力や個性を発揮できる社会」という意味です。

国はこの男女共同参画社会の実現を「21世紀の最重要課題」として力を注いでいます。それはどうしてなのでしょう？

それは、現在の日本には性別を理由とした固定的な役割分担の考えが多く残っていて、まだまだ男女が対等な立場に立って社会を創り上げているとは言えないからです。

「男らしさ」「女らしさ」という言葉からどのようなことを連想しますか？日常的に使う言葉であり、何かしらのイメージを持っていることと思います。

しかし、私たちの日常を注意深く観察してみると、この「男らしさ」「女らしさ」から生まれるイメージがマイナスに働いてしまっていることが少なくありません。

例えば、「男らしさ」「女らしさ」にとらわれ過ぎて、「男はこうあるべき」「女はこうでないといけない」といったふうに自分を押しつけてしまい本当の自分を表に出せなかったり、あるいはそういった考え方を相手に押し付け、嫌な思いをさせてしまった等、思い当たることはないでしょうか？



子育て



- ・男性が子育てをすることについて職場の理解が低く、育児休業を取得する男性がほとんどいない。
- ・赤ちゃんを連れてくる男性を見かけると「母親はどうしたのか」と考えてしまう。

しつけ・進路



- ・「男は強く、泣いてはいけない」、「女はやさしく、おしとやかに」と教えている。
- ・理科系、技術系に進む女子の割合が低いので、本当は興味があっても理科系の進路を選択することに抵抗がある。

職場



- ・性別を理由とした昇進、昇給の差がある。
- ・「男性は主要業務」「女性は補助業務」というような性別による仕事の区別がある。
- ・お茶くみ、雑用はいつも女性社員が行っている。
- ・女性社員に「寿退社」を迫る雰囲気がある。

家事



- ・日曜日、家にお父さんがいるのにいつもと変わらずお母さんばかりが家事・育児に振り回されている。
- ・お父さんの手料理を食べたことがない。

性別だけで判断
していませんか？

地域活動



- ・自治会等の役員名簿には男性（夫）の名前が登録されているが、実際に地域で活動しているのは女性（妻）であることが多い。
- ・近所づきあいは妻に任せているため、町内の人と道ですれ違ってもあいさつができない。

もちろん、個人が内面で「男らしさ」「女らしさ」といったことについて考えることは自由ですし、男女の服装の違いや「ひな祭り」「こいのぼり」といった文化、伝統を否定して男女を同様に扱おうとするのは男女共同参画社会の目指すものではありません。人生の様々な場面で、「男だから」「女だから」という理由のみで個人が判断されてしまう社会は誰にとっても生きにくいものであり、「男」「女」である前に一人の人間として、誰もがその個性を尊重され、「自分らしく」夢や希望を持って生きていける社会を実現しようというのが男女共同参画の考え方です。（裏へ続く）

また、男女共同参画社会の実現は、今日深刻化している少子高齢化問題の解決策の1つであると言われていています。少子高齢化が進むことにより労働力人口が減少し、社会の活力が失われていくと心配されていますが、男女が対等な立場に立ち仕事と家事を分担することにより、本当は働きたいのだけれど家事・育児、あるいは介護等があるため、家から出られずにいた女性たちが社会で活躍し始め、新たな労働力となっていきます。

男女共同参画社会を実現するためには行政の取組みだけではなく、市民、事業者の理解・協力が不可欠です。東大和市は男女共同参画社会の実現を目指し、平成13年に「男女共同参画都市宣言」、続いて平成17年には「東大和市男女平等を基本とした男女共同参画の推進に関する条例」を制定しました。市における男女共同参画が進むよう市、市民、事業者の責務を規定しています。

国の計画である男女共同参画基本計画には「男女共同参画社会を実現することで、社会全体の活力が増し、人々が将来への夢を持てるようになる」と確信する」とあります。

「男女共同参画」、新しい自分の可能性が見えてきませんか？

市民インタビュー

身近にある男女共同参画に関することをテーマにして、市民の方に取材しました

あなたは会社で

結婚の予定を聞かれますか？

～女性にとって

働きやすい職場とは、

労働の場における男女の差別をなくすための取り組みはこれまで様々なされてきました。しかし、まだまだ男女の立場は対等ではなく、身近なところに性別を理由とした差別があるようです。

ある大手企業に勤めるAさん（30代 女性）。入社して14年になる現在の職場は、社員の3分の1が女性。

表向きには結婚後も安心して働ける社風をアピールしているが、実際は正社員から派遣社員へ切りかえる等、既婚女性が働きづらい方策がとられているようです。

未婚のAさんも入社以来、半期に一度ある上司との面談の中で必ず結婚の予定について聞かれるそうです。そのことに疑問を感じ始めたAさんは、自分の後に続く女性のためにも会社に改善を求める姿勢をとりはじめています。

このような職場における男女の差別を受けていると感じたときは、泣き寝入りをするのではなく、市役所の「男女共同参画苦情等処理窓口」に相談してください。

女性の相談員がじっくり話を聴き、あなたが望む方法で問題解決に向けた行動をとってくれます。

取材・文 編集委員

男女共同参画苦情等処理窓口

相談日時：毎月第1・3水曜日
午後2時～4時

場所：東大和市役所 3階
8番窓口 市民生活課

電話番号：042-563-2111(内線1715)

直接窓口にお越しいただくか、電話でご相談ください。



秘密厳守 無料

～お気軽にご相談ください～

男女共同参画の視点から

自治会活動を考えてみました

「地域交流」「防災・防犯」等、自治会は地域で大きな役割を果たすのですが、いま自治会の空洞化が進んでいると言われています。「時間にとりがない」「個人の生活を優先したい」等を理由に、特に若い世代が自治会から減ってきているようです。

自治会活動の現状を知るため、市内のある自治会を取材しました。

【町内でのふれあい】



取材を行なった自治会は約130世帯が所属、その歴史は古く30年以上前から続いているそうです。地域交流を目的とした様々な催し物を行っており、その中のひとつ「餅つき会」は町内の名物。離れて暮らす娘さん夫婦が帰ってきたり、孫を呼んで餅つきを見せているおじいさん・おばあさん等、たくさんの方が集まるそうです。

また、夏のイベントとしては「花火会」が人気。事前に飲み物、花火を準備しておき、当日は日が落ちると町内の人が集まり始める。昔懐かしい線香花火や大きな音がする打ち上げ花火に「綺麗だなあ」と見とれているとあっという間に終わってしまうとのこと。

昔からある町内の風景。このようになふれあいを繰り返すことで、自分の住んでいる地域がわかってくるのではないのでしょうか。

【地域の防災力】

自治会活動の中でも「防災」は大きな役割のひとつです。阪神・淡路大震災、新潟中越地震では自治会・

町内会のしつかりしていた地域とそうでない地域とでは災害時の対応、その後の復興に大きな差があったようです。災害発生時、実際に行政の救助活動が始まるまでにはどうしても時間がかかってしまいます。しかし、それまでの間、町内の人同士が助け合ったことで救われた命がたくさんあったということです。混乱の中、物資の配布に関しても自治会で把握している各世帯に関する情報がとても役に立ったと言われています。

今回取材を行なった自治会も「防災」に対する意識は高く、一昨年に自主防災会を作ったときのエピソードを聞くことができました。

まずは、町内の世帯の状況を把握するため会員、非会員を問わずアンケート調査を行ったそうです。年代・性別の他、障害の有無や寝たきりの人がいるか等、災害時における救助を想定しての内容。しかし、実際に調査を行なってみると、「個人情報を知れてしまう」といった理由からアンケートを拒否されたこともあったそうです。

万が一の場合に備えること、プライバシーを尊重すること、どちらも大切なことです。難しい問題ですが、考えていかなければいけないことだと思えました。

【取材を終えて】



自治会活動の現状を知るため、取材したわけですが、「世代を越えた交流」や「地域ならではの行事」等、昔と変わらない地域の温もりが生きていることを感じました。

しかしその一方で、やはり若い世代の加入が減少しているという問題もあるようでした。若い世代の地域離れは全国的であり、その背景には長時間労働や共働きで地域活動に向ける時間がないといった切実な理由

もあるようです。また、自治会に加入している世帯でも、現役で働いている男性は仕事が忙しく、自治会活動にはなかなか顔が出せないようでした。

仕事と生活のバランスを整えることを「ワーク・ライフ・バランス」と言い、国をはじめ地方自治体のほか、最近では企業等も積極的に取り組みを進めているようです。

仕事に追われがちな日常かもしれませんが、家庭、地域あるいは個人の時間も大切に、充実した生活を送れる社会になってほしいものです。

【地域デビュー!】

さて、少し話は変わりますが、今年から団塊の世代の方たちが一斉に退職し始めます。「趣味に生きる」「旅行がしたい」等、第二の人生計画は人それぞれでしょう。しかし、「かつて仕事に費やしていた熱意と時間」がポツカリ空いてしまうことで、どうしたらよいか戸惑う人も増えるだろうと言われています。

退職後、「居場所がなくなる……」と焦っているお父さん、地域はあなたを待っています。

編集後記

取材・文 編集委員

家庭で職場で地域社会で、差別や偏見、暴力などをなくし女性男性が共同で生き生き暮らしてほしいという思いで、編集委員として「はーもに」に携わりました。男女共同参画社会が広く実現できまますように願っています。

編集委員 伊藤 泓子

◆男女共同参画社会実現のための情報誌「はーもに」はより多くの方に読んでいただけるよう、今号より市報折込となりました。バックナンバーを希望される方は、市民生活課までご連絡ください。